

女子美

No.169/2011



- 2P デザイナー 矢部綾子さんインタビュー
- 4P 新入生のみなさんへ
- 5P 2011年度新任専任教員紹介
- 6P 退職教員からのメッセージ
- 7P 染織家 石垣昭子氏×小倉文子教授
- 8P 女子美術大学・東京理科大学 学長・理事長鼎談
- 10P マーラ・セルベット氏 講演会開催
- 12P 女子美スタイル☆最前線 レポート
- 15P 三菱一号館美術館 高橋明也館長講演会 他
- 16P パリで学生デザインの手拭展「b・tan」を開催 他
- 17P 高山村のオリジナルアイスクリームを企画・製造 他
- 18P 海外スプリング・スクール 報告
- 19P パリ賞受賞者アーティスト 田口一枝さんエッセイ
- 20P 2010年度 卒業（修了）制作展
- 22P 女子美アートミュージアム展覧会報告
- 23P 相模原市上溝地区シンボルマークをデザイン 他

女子美術大学広報誌

OGインタビュー グラフィックデザイナー 矢部綾子さん



現実的です。実用的でなければ売れません。学生時代は女性であることを自分であまり意識していませんでしたが、仕事を通じて女性だからできることも考えるようになりました。

■学生時代に好きなものを見つける

今はほとんどすべてのデザインを Mac でしていますが、女子美に在学していた当時は、学校に Mac が数台しかありませんでした。教えてくれる人も少なかったし、あまり熱心な学生ではなかったので、授業のときしか触らなかったと思います。卒業した後、デザイン事務所でアルバイトをしながら、親に借金して Mac を買って自分で勉強しました。

今は Mac がないと困りますね。でも、基本的に Mac はツールです。Mac を使いこなす技術は誰でもすぐに習得できます。大切なのは、自分のセンスだと思います。センスって人それぞれだとは思いますが、自分が「いいな」と思うもので、自分の目指すビジョンですね。例えば、画像の処理ひとつでも最終的にこうしたいというビジョンがないとできない。ではビジョンはどうやってつくるのかというと、たくさんのデザインを見ることと、もうひとつ知識を広げることです。例えばフォントを選ぶとき、それを使うことによって得られる雰囲気や時代感に関する知識とか。アカデミックな知識も雑学も、あればあるほどデザインの引き出しは増えますし、それを選んで使う力も磨かれると思います。日常の中から得られる知識もとても重要です。いつも見ている物を違った目線で見たりと面白い

本学の卒業生である矢部綾子さんは、独立してグラフィックデザインの仕事をされています。デザイン会社 Cap、groovisions に勤務の後、現在は自身の会社 kidd を設立し、書籍や雑誌、カタログなどのエディトリアルデザインや音楽分野のデザインなどさまざまな作品を生みだしています。就職難の時代に卒業して、いろいろな経験を積まれた矢部さんだからこそお話しただけるデザインの仕事にとって大切なことを伺いました。

■人が喜んでくれる仕事をしたい

私の学生時代は渋谷を中心とした音楽系のカルチャーがおもしろい時代で、ライブなどいろいろなイベントに通ってました。漠然と、将来は音楽系のデザインをやりたいと思っていましたね。groovisions に勤務してから、たくさんの CD のデザインの仕事にも参加することができました。その中のひとつは、RIP SLYME の CD ジャケットです。メジャーデビューする時に、赤塚不二夫さんのマンガを基にしたキャラクターをデザインさせていただいたことがきっかけで、それ以来10年間、ジャケットのデザインに携わっています。皆知っているマンガのフォーマットを使ったことで、長く汎用性のあるデザインができたと思います。

私がデザインをする時にいつも心がけているのは、どんな小さなものでも「このデザインが好きで大切にしたい」と思えるものをつくるということです。自分自身が「いらない」と思うものはつからないように

しています。デザイナーとして当然のことなのですが、仕事をしている中では、難しい条件もたくさんあります。様々な条件をクリアにしながら、クライアントも自分も大切にしたいと思えるものをつくって、手に取った人に喜んでもらえるようなデザインをしたいと思っています。

仕事をしている中で、自分のデザインや感覚を理解してくれる人と会うことも重要だと思います。デザインはたくさんの人と関わりながらつくっていくので、感性の合うスタッフと仕事ができるように、他の人の仕事もよく見るようにしています。

私が女性だからということで仕事を依頼されることもあります。女性的なデザイン感覚を社会が必要としていると思います。女性は、美しい、かわいいものも好きですが、それだけではだめですね。合理的で



これまで手がけた作品の数々。中央にはRIP SLYMEの「STAR」(2011年3月2日発売)

アイデアが生まれて来ると思います。

今の若い人を見ていて思うことは、外にあまり出ていないような気がする。とにかくいっぱいいろんなものを見て、そこから自分が好きなものが何かを見つけることが必要だと思います。なんとなくいろんなことを手広くやることと、集中して自分が好きな世界観をつくること、この両方が大切なんだと思います。それが、仕事をする中で、「この人は何ができるのか？」と問われたときに生きてきます。私が女子美を卒業したころよりも、今の時代はそういうことが大事になっていると思います。今は自分で「好き」とか「できる」を発信しないとだめですね。

■デザインの業界は日々変わっている

以前はデザイン業界は広告系とそれ以外のデザインとに分かれていましたが、今はジャンルにとらわれない仕事をするデザイナーが増えました。



企業のクリエイティブディレクションからCDジャケットのデザインまで幅広い仕事をしているデザイナーもいます。一方で、小さな規模で自分の好きなデザインをしているデザイナーもたくさんいます。

私は後者のほうのデザイナーで、書籍の仕事が多いのですが、他にもいろいろなジャンルの仕事をしています。オルビスという会社のアンダーウェアの仕事では、WEBサイトのデザインから、カタログ、テキストスタイルまでデザインしました。ブランドのコンセプトが、下着から考えるエコロジーということで、地球温暖化について考えるコミュニケーションツールも制作しました。

今、就職が厳しい時代だと思います。でも就職先がなければ、最初から自分でやってみるのもいいと思います。私が卒業した頃とは状況はかなり変わっていて、自分で会社をつくってはじめる人は多いです。デザインだけではなくて、少人数の代理店の



ようなプロダクションをつくったり、お店をつくったり、商品の企画も生産もデザインも自分たちでやっている面白い会社がたくさんあります。そういうところに就職するのもいいし、自分自身で始めてもいいですよ。若いからこそ失うものもないし、やりたいことをやってみてほしいと思います。学生時代はとにかくいろいろな所に向いて、いろんなものを見た方がいいと思います。チャンスは待っていても向こうからやってきてくれません。自分で探さなければいけないと思います。じっとしてはいけません。

■自分で“架空のプロジェクト”を考えてみる

私は今年、独立して10年目になりました。今、これまでの仕事を整理してポートフォリオをつくっています。学生のみなさんに対して、ポートフォリオをつくる時のアドバイスとしては、自分で“架空のプロジェクト”を1から考えて、デザインをするだけではなく、コピーやテキストも自分で書いてみるといいと思います。自分のお店をつくるか、テーマはなんでもいいと思います。仕事をしていくなかで、何もないところからコンセプトを考えたり、コピーや文章を理解して、それに合ったデザインができることはデザイナーとしてとても大切だと思います。

デザインを学ぶ人は、絵を描いたり、表現のスキルを高めることも大事ですが、それ以外のことを総合的に考える力をつけなければいけないと思います。編集力とも言えるのですが、多くの情報を整理して、その中で何が一番伝えたいことなのかを選択し、表現する力が求められます。特にウェブの仕事の場合には、編集力はとても重要になってきます。何が大事なポイントなの

かを見極めることはとても大切です。

デザインの仕事は、数多くある物事をわかりやすく整理することが基本です。そこに“ちょっと違うものの方”をプラスして、人に何らかの気付きを与えられるのがいいデザインなんじゃないかなと思っています。“ちょっと違うこと”を自分の好きなことの中から見つけられるように、学生の時間をめいっぱい楽しんで過ごしてほしいですね。

(インタビュー：2011年2月18日)

プロフィール

矢部 綾子 (やべ あやこ)

岩手県出身。1994年女子美術大学芸術学部デザイン科環境計画専攻(現 デザイン・工芸学科環境デザイン専攻)卒業後、Cap、groovisionsを経て2002年に独立。2005年に「kidd」を設立し、書籍、雑誌、カタログ、CDジャケットなどのアートディレクション、デザインを手がける。

広報誌「女子美」の表紙を矢部綾子さんがデザイン!



矢部綾子さんからのコメント

表紙はヘルメットを被った女の子の横顔、裏表紙はチェーンソーを持った女の子の切り絵+コラージュです。アイデアをたくさん持って未来を切り開いて行く女の子のイメージです。

Message ● ① 新入生のみなさんへ



学校法人女子美術大学
理事長 大村 智 (おおむら さとし)

ご入学おめでとうございます。

本学園は、1900年、女性に門戸を開く美術の専門教育機関がほとんどなかった時代に、横井玉子、佐藤志津らの先進的な思想を基に開学しました。110年間、建学の精神である「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を継承し、画壇・デザイン界、教育界など、実に多彩な分野の第一線で活躍する人材を送り出してきました。我が国の実業界にあって多くの女性経営者を輩出する有数の大学としても社会に大きく貢献しています。

「芸術は人の魂を救い、生きる力を与える」というアウシュビッツ強制収容所から生還したヴィクトル・フランクル博士の言葉があります。芸術は人々の心に潤いを与え、心豊かな人生を送るために極めて重要な役割を担っています。経済不況と人の心の荒廃が目立つ今日の社会にあって、芸術こそが最も必要とされています。

皆様には、感性を磨くと共に人間らしく生きるための精神の向上に心がけ、「生きる力」を身につけて頂きたいと思います。そして、人生のこの上ない手本である諸先輩方の芸術や生き方にも学び、自身の人生の指針を立てるための一助とされることをお勧め致します。

6月1日就任 新任役職者紹介



学長 横山 勝樹 (よこやま かつき)

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。私たち「女子美」は、新しい仲間となったみなさんを心から歓迎しています。

女子美術大学・女子美術大学短期大学の建学の精神は、「芸術による女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家・美術教師の養成」です。女子美の先生たちは、この言葉の意味を考えながら、美術とデザイン、そして関連する学問の世界で日々制作と研究を実践している人々です。みなさんの先輩たちも、先生たちとともに110年間この精神を受け継いできました。みなさんもこの言葉の意味をぜひ心に留めて、これからの大学生活を送ってください。

21世紀は、地球環境・世界平和の問題など、難しい問題が山積している時代です。それゆえに日々の制作と研究を通して、女子美の建学の精神を世界に発信していくことが、私たち、つまりみなさんの使命です。女子美でたくさんの仲間を見つけてください。そしてみなさんの活躍に期待をしています。

大学院美術研究科長



上葛 明宏
(うえくす あきひろ)

芸術学部長



橋本 信
(はしもと まこと)

短期大学部長



小林 信恵
(こばやし のぶえ)

Message ● 2 2011年度 新任専任教員紹介



粟辻 美早

Awatsuji Misa

芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻 准教授

1965年東京生まれ。
1988年多摩美術大学デザイン科グラフィックデザイン専攻卒業
1991年CRANBROOK ACADEMY OF ART デザイン科 (USA) 修士号を受ける
TAMOTSU YAGI DESIGN (USA) を経て、1995年株式会社粟辻デザイン設立
日本グラフィックデザイナー協会会員
日本タイポグラフィ協会会員

希望に満ちあふれた大学生活。人生に2度と訪れない最高の時期です。今から学び体験すること全てが、今後のみなさんの基礎となり、それぞれに大きな影響を与えていくことでしょう。何事にも積極的にぶつかってください。みなさんが持っている可能性は、無限にひろがるはずです。クリエイティブな仕事に携わることの楽しさを、実際の現場からの声として伝えていきたいと思えます。



季里

Kiri

芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域 教授

大阪府出身。大阪教育大学美術学科在学中にNICOGRAPH '83CGグランプリ優秀賞を受賞。卒業後大阪大学工学部電子工学科に研究生として在籍、CGアニメーション作品を国内外で発表。1993年株式会社七音社共同設立、取締役ビジュアルプロデューサー。

表現に関するテクノロジーはこの30年間でめまぐるしく変化し、その進化スピードはますます加速しているように感じます。テクノロジーだけに依存した表現は、あっという間に陳腐化し捨て去られていくのを見てきました。変わるものと変わらないもの。変わるから変わらないもの。それらを見極める力を蓄え、ひらめきある着想とあたためてきた想いを形にする方法を学びましょう。



鈴木 淳子

Suzuki Atsuko

芸術学部 教職課程 准教授

福岡県生まれ。
1986年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒業後、東京都で公立小学校教員、教育委員会指導主事、小学校副校長として勤務。
図画工作・美術科の教科研究とともに教員研修や若手教員の指導・育成にあたる。
「頑張り！美術、図画工作」（共著、紫峰図書）など。

これまで教育行政や学校経営に携わった経験から、学校はまさに社会の縮図だと感じています。格差社会や環境、食の安全の問題など現代社会が抱えるさまざまな問題は、子どもの生活や学びと密接に関わっています。これからの美術教育について、学校だけでなく地域や社会との関わりによる新たな可能性を皆さんと共に考えていきたいと思えます。



日沼 禎子

Hinuma Teiko

芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域 准教授

1969年青森県生まれ。
女子美術大学芸術学部卒業後、ギャラリー運営企画会社、美術雑誌編集者等を経て、国際芸術センター青森設立準備室、同学芸員を務める。アートサポート組織「ARTIZAN」プログラムディレクター。アーティスト・イン・レジデンスを中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会を多数企画運営。

学生時代を過ごした校舎に再び戻ってきました。今ここから始まる女子美生のみなさんとの新たな時間を想像し、懐かしさよりも新鮮な気持ちで胸を躍らせています。アートプロデュースの仕事は、芸術と社会とを切り結ぶ大切な役割です。多角的な視線を持ち、芸術だけではなく多くの物事に対し関心を持ち、それらを等分に捉えるバランス感覚が要求されます。多くの人物、出来事に出会い、世界の多様な価値について共に考え、学んでいきましょう。



淵田 隆義

Fuchida Takayoshi

大学院美術研究科
芸術文化領域（色彩学）教授

1950年生まれ。慶應義塾大学工学部卒業後、(株)東芝に入社、総合研究所にて照明・画像機器の色彩評価技術を開発。工学博士(慶大)。カナダ国立研究所客員研究員、東芝ライテック(株)研究部長、技術統括責任者等を経て、(株)東芝にてLED照明の国際標準化を推進。(社)日本照明委員会会長。2005年(社)照明学会賞等。

照明と色彩の研究は、共に100年以上も歴史がある研究分野でありながら、今でも捉える視点によって新鮮な研究対象となります。特に芸術文化と照明・色彩の関わりは大きく、テクノロジーの切り口から捉えるとまた違ったものが見えてきます。

研究の夢とはいったい何であろうか。それは情熱と努力を注ぎ込む方向付けであり、夢を持ち続けて、努力していれば、チャンスは必ず誰にでもいつか訪れ、「これはあいつしかない」とパッと夢が現実になるものです。ぜひ夢を探してほしいと思えます。



山本 雄三

Yamamoto Yuzo

短期大学部造形学科美術コース 准教授

1964年 鳥取県生まれ
1991年 武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵コース修了
1998年 独立展新人賞受賞
1999年 独立展奨励賞受賞
2000年 独立展独立賞受賞
2002年 昭和会展日動火災賞受賞
2009年 28回損保ジャパン美術財団選抜奨励展優秀賞受賞
2010年 第8回前田寛治大賞展大賞受賞
現在 独立美術協会会員

自分自身の表現においては、決して無理をしない。自分から距離のあるモチーフを選ぶのではなく、自然に身近なものから・・・結果として、それが表現あるリアリティに繋がる。これは、私が学生の時、恩師から言われたアドバイスの中で、今でも唯一心に残っている言葉であり、私の制作の原点です。2年間という時間は決して長くはありませんが、その中で、皆さんの表現の原点と一緒に探していけたらと思っています。

Message ● 3 退職教員からのメッセージ

大森 達次

Ohmori Tatsuji

芸術学部 芸術学科 教授

私の退職については唐突に思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、私としてはかなり以前から予定し、計画しておりましたが、事情があってそのことを早々に表明することは差し控えることにしました。そのため、ことによっては退職後の1年目は専任並みの授業を担当するようなこともありうると覚悟し、計画の中に織り込んでいました。したがって私の新たな人生は実質的には2年目から始まります。

女子美の専任となって20年、それはある意味で戦争と災害の20年だったといえるかもしれません。湾岸戦争を皮切りに、阪神淡路大震災、米国同時多発テロ、イラク戦争、そして今回の大震災。凄まじい惨状に無力感を抱きながら終わりつつある20年。かつて青春の一時期を過ごした街が被災地となり、福島県浜通り地方に住む大学同期生の安否は現時点で不明のまま。海の近くに家を構え、「ゆっくりした時間を気ままにのんびりの毎日」という彼の言葉が耳に残っています。

もちろんこの20年は女子美芸術学科の歴史と重なっており、その最後を私の個人的事情から専任として見届けることができないことを誠に申し訳なく思っています。

これまで女子美のいろいろな方に大変お世話になりました。心から感謝いたします。

小島 康昭

Kojima Yasuaki

芸術学部 基礎教養(保健体育) 教授



昭和43年(1968)4月、女子美に助手として勤務を始めて以降、一貫して考えてきたことがある。「健康」の必要性、重要性を学生にどう認識させようか、また健康維持につながる「運動」を好きになってもらえるにはどうすれば良いのか、である。以来もう43年もたってしまったようである。「健康」は充実した生活の基盤であり、より高いレベルの制作活動にとって必要不可欠なものである。「健康」につながるような「運動」を生活の中に積極的に取り入れて、世界に羽ばたくクリエイターが女子美から巣立つことを祈る。

早瀬 和宏

Hayase Kazuhiro

芸術学部 メディアアート学科 教授



私がメディアアート学科教授に就任した年は2001年。アメリカでは9・11事件、そして、妻が癌で死にました。メディアアート学科の教師4名が中国広州美術学院での特別講義の真っ最中の事でした。そして、2011年退職。東北大震災、原発事故、未曾有の災難に遭遇しました。少なからぬ因縁を感じます。人の営みと自然の営みについてカルマと思える衝撃を感じています。不謹慎かもしれませんが退職を迎えて、気分は清々としています。体で感じたカルマを見つめるため、これまでとは異なった人生を歩み始める善い機会だと思っています。仕事や報酬といったことから距離をおき、もっと自由に生き、考えることが許されるような感覚が萌えています。再び、愛しい人と旅したインドへ……。手始めに岩手の釜石で災難に遭遇している親友を見舞いたいと思っています。

NEWS ● 1 卒業生・本学非常勤講師 秋山さやかさん 第21回タカシマヤ美術賞受賞



右から酒井忠康運営委員長、秋山さん、佐野学長、富山秀男運営委員

「公益信託タカシマヤ文化基金」は、時代を担う新鋭作家と美術文化に寄与する団体への支援を目的に設立されました。作家個人へ贈られる「タカシマヤ美術賞」の第21回受賞者として、本学卒業生の秋山さやかさんが選ばれました。秋山さんは2001年に女子美術大学大学院 美術研究科 美術専攻 洋画研究領域を修了し、現在は現代美術作家として国内外で活躍中。本学の非常勤講師も務めています。1月18日、日本橋高島屋新館にて贈呈式が行われ、秋山さん他2名の受賞者(ヤノベケンジ氏=現代

美術、王舒野氏=絵画)や審査員の方々はじめ、受賞を祝う多くの参加者で会場は華やかなムードに包まれました。

秋山さんの作品は、様々な土地を訪れ、実際に生活しながら、自分のあるいた軌跡を地図やあらゆる素材の上に縫い込んでいく、という表現をとっています。受賞者からのコメントの中で、「私は今まで、国内外約35カ所を巡って来ました。そして、それぞれ35の色彩を見出せたと思います。1番初めのストックホルムは銀で、2006年イギリスのアウバスタンは今日着ているワンピースのようなビビッドな緑でした……。つまり、この私の中には35通りもの色が詰まっています。とても幸せに思います。」と、自身のこれまでの制作を振り返りました。「ずっとずっと制作を重ね、この35が何100色にもなり、もっともっと自分の色を蓄えて、花を咲かせるよう、頑張っていきます。」と今後の展望を語りました。

秋山さんは作家としてデビューしてから10周年を迎えました。「その節目となる年に、この賞をいただけてうれしい」と、笑顔で述べました。また、今回秋山さんの推薦者となった運営委員の佐野ぬい本学学長は、秋山さんの作品について、「日常生活の時間の足跡をたどって、場所や出会った人など、記憶のふしづしをとどめている作品」と評価し、受賞の喜びを共に分かち合う姿が印象的でした。



「あるく 私の往来基本形 上野恩賜公園 2008年12月25日、2009年4月3日、7日、14日、5月12日、16日」 上野の森美術館 蔵(写真は部分)

染織家 石垣 昭子氏 × 小倉 文子教授



2010年の夏、芸術学部アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域の小倉文子教授が「素材ミュープロジェクト」(*)の活動の一つとして、沖縄県西表島に卒業生である石垣昭子氏を訪ねました。本活動は、「糸から布へ」、「布から染へ」、を主題とした日本の伝統繊維や染織、衣服の源流を辿り、モノ創りの本質を探究するプロジェクトです。石垣氏は沖縄県八重山・竹富島に生まれ、高校卒業後、本学服飾科に入学しました。卒業した後、沖縄に戻り染織家として活動を続け、現在は、紅露工房を主宰し、沖縄の伝統の染織を受け継ぎながら新しいクリエイティブなデザインの企画制作を行っています。龍村仁監督の映画『地球交響曲(ガイヤシンフォニー) 第5番』に出演したことを機に、その独自の生き方は世界に知られるとともに、影響を受けた若い人たちが集まる人材育成の場となっています。今回、小倉教授は石垣氏のワークショップに参加し、糸芭蕉を倒して糸を作る作業や伝統繊維について学ぶ体験をしたのち、石垣氏にインタビューをされました。

—女子美で印象に残っていることなどお聞かせください。

こんなに伸び伸びと勉強ができる場所はないと思いました。女子だけという環境が珍しかったし、寮でのいろいろな先輩たちとの出会いなど、楽しく、珍しい経験ばかりでした。校風が私に合っていました。

美しい物を見る目を養い、多くの気付きを女子美は、与えてくれました。東京にいっぱい珍しいものがあるじゃないですか。今まで本のなかでしか知らなかったモノやコトが目前にある。そして、文化や文明に触れている喜びを日々感じていました。授業では、中山公男先生の美術史に興味を持ちました。歴史の積み重ねが今に生かされていくこと、繋がっていることが重要だと分かったことは大きな収穫でした。

—私たちがすると沖縄にこそ珍しい物が

いっぱいあるとありますが逆なんです。

そうです。在学中に柳悦孝先生との出会いでかなり影響を受けました。駒場の民藝館に通い出したこともそのひとつです。沖縄のしかも竹富島の織物がいっぱいあったわけですよ。何で私の周りに普通にあったものが、中央に展示作品や展示物としてあるのだ?という感じでした。竹富の家に帰って引き出しを開けてみたら、いっぱいあるんですよ。祖母は着道楽だったので、「あっ、同じ!これもある!」って、いっぱい見つけました。一晩中紡いだり、織ったりしていた祖母への感情が、哀れなものから尊敬に変わりました。女子美に行ったからこそ気付けたことです。

—卒業して沖縄に帰ることを決めた理由は何かあったのですか。

竹富で町長をしていた叔父から仕事を手伝ってほしいので1年だけ戻ってほしいと頼まれたことがきっかけです。その仕事というのが、沖縄の復帰記念事業として沖縄県に民芸館を設立し、そこでの企画運営を任される、という話でした。

—その後、京都に行かれたと聞いていますが、何があったのでしょうか。

竹富民芸館に京都市芸協会の一行が訪れ、その中に志村ふくみ先生がいらしてお会いする機会に恵まれました。私が自己流に泡盛に紅花を漬けていたところをご覧になって、先生が箔を作って染めたら見事なピンク色が出たんです。こんな世界があるのかと、もっと勉強したいという想いから志村先生を頼って京都に行きました。

—3年して、竹富島に戻ってからすぐに西表島に移られていますが、それは、紅露工房と関係があるのですか。

結婚でした。金星(きんせい:順天堂大学を卒業して西表に戻り体育の先生をされていました。島を愛し、島のために貢献していらっやいます。)と出会って西表にきました。同時に工房も開きました。竹藪だったところを開墾し、ぺんぺん草が生え、それを耕したらまた力草が生えてきました。植物学の先生が、スマレが出てきたら人間が住む所だよって教えてくれて、何年かしてスマレがいっぱい咲くようになったんです。そろそろいい環境になったかなと思いました。

—植物が教えてくれるってすごいですね。

そうです。志村先生もそうでした。自分の心の扉を開けたら、自然はどんどん

入ってくる。私はあなたに技術的なことは伝えていないと思うけれど、種だけは与えなきゃねって。その時に何の種をくれるんだらうと思いましたけど、自立してから後になってその意味が実によく理解できました。その言葉が今も原点です。

—石垣さんは、衣服の制作、衣裳の仕事もされていますが、そのことについてお聞かせください。

衣の文化は女性にとって身近で、仕事につながります。産むという女性性、女性の手仕事、それが製糸になった。衣は一つの職業としてあるけれど、今は分業的、生産的職業として製品という視点で生産しています。ですが、作る側は、文化的な思考、思索がないといけないと思うのです。作り手として伝えることが弱かったから、産業革命で手仕事としての女の文化がなくなっていった。だからもう一度革命以前の皮膚の延長としての布という原点に戻って考えた時に、草木で染めた布は全部葉だし、皮膚も植物の精を纏うという考え方から、琉球王朝の時代からちゃんとやってきたことを見直しています。

王様を守るために女性が上に立ち、祈りを捧げた。琉球の伝統から見ても、纏うものは全部女性の仕事であり文化でした。

自分も手織りや麻の物を着ると精神的な影響があるのだということを実感した今、この仕事の本当の意味や意義をこれからの若い人たちに伝えなければ、という気持ちでいます。

—おっしゃるように、衣服を纏うことからいろいろな精神的影響を受けますし、与えることもできます。そういう意味で、衣服は環境の一つとなり得る、ということですね。ありがとうございました。これからも石垣さんを慕って集まってくる若い人たちにたくさんのお話を伝えてください。

石垣さんの西表島での生活は、自然から発せられる声を聞き、私たちが忘れていた地に足がついた真の生活者としての姿がそこにあります。今も女子美の卒業生がお世話になって何ヶ月も紅露工房にいます。若い人たちが集まり、石垣さんの知識や技術を受け継ぐと同時に、自然の声を聞きながらともに生きる開放的空間が紅露工房にありました。

*素材ミュープロジェクトは文部科学省によって質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)に採択されました。

女子美術大学理事長・東京理科大学理事長・学長 鼎談を実施



女子美術大学では、基幹であるアートとデザイン分野の拡充と学際分野の開発を目的として、異なる教育研究分野を有する大学との連携交流を試行しています。他大学の学生との相互交流による学生の成長や教職員の資質向上、知的資源の再構築や活性化を目指しています。

その一環として、2009年度より東京理科大学との交流事業を開始し、サイエンスとアートの融合を目指して東京理科大学理学部学会の吹き抜けの大壁面に、ヒーリングアート作品を設置するプロジェクトが進行しています。東京理科大学の学生と女子美術大学の学生がコラボレーションにより、コンセプトを提起し、制作したヒーリングアート作品です。本計画の提案者である女子美術大学の大村智理事長、東京理科大学の塚本恒理理事長、同藤嶋昭学長が集い、同専門職大学院の馬場錬成教授進行による鼎談が、12月15日、東京理科大学にて行われました。

馬場：芸術も科学も人間に内在する創造性を触発する活動です。両者には共通項があるのではないかと思います。特に大村先生は科学者でありながら、美術にも造詣が深く、美術館まで設立されていますね。同じ創造性というくくりで何かご意見をお持ちではないでしょうか。

大村：過去のノーベル賞受賞者においても、芸術からインスピレーションを受けて科学研究に結び付けた例がいくつかあります。C60フラーレンの発見でノーベル化学賞を受賞したハロルド・クロトー教授は、カナダのモントリオール博物館で鉄筋のドームを見て、六角形と五角形を組み合わせると丸くなるという構造から、「これだ」と思ったのだそうです。これはまさに芸術家と科学者の創造性が一致することを示した良い例だと思います。

馬場：芸術と科学のオーバーラップであるのとらえることができますね。一般的に、東京理科大学と女子美術大学は異質な分野だと受け止められていますが、今回の連携

のきっかけはということだったのでしようか。

大村：東京理科大学の卒業生の方々が母校に、何か面白いことをしたい、良いことをしたいと思って私のところにいらした。それで、女子美にヒーリングアートの制作活動があると紹介したら、両学が引き合わされたのです。お互いの心がそうさせたのでしょう。女子美にとっても理科大学にとっても、今までにない何かを感じる足がかりになると思います。科学を飛躍的に進歩させるのは、異なる他の分野から飛び込んできた人間であるという言葉があります。科学者も芸術家と議論することによって何か生まれるのではないかと期待しています。

馬場：大村先生は、東京理科大学とどのような結び付きをお持ちでしょうか。



女子美術大学 大村 智理事長

大村：私は山梨大学卒業後に都立高校の教員になり、土日と週1日の研究日を利用して理科大学へ通いました。平日は文献を読みあさり、土日は泊まり込んで夜中まで実験をやっていました。東大では薬学の博士号を、東京理科大学では抗生物質の立体構造で理学博士号を取得し、さらに山梨大学へ戻って微生物の発酵化学を学びました。この経歴は、その後の研究に大いに役立ちました。当時、抗生物質の研究者には純粋な化学をやっている人は少なかったのですが、私は東京理科大学での経験から分光分析機器を使いこなし、新しい構造を持つ抗生物質を見つけていきました。微生物と化学という異質なものを融合させることで、次々と新しい化合物を見つけていくことができたのだと思っています。

塚本：一つのことばかりしているよりも、その方がいいですね。

大村：当時教授からは「お前は才能を分散

させすぎるから、もっと集中しなさい」と言われたこともありましたが、今では絵までやってしまっただけで、性分だから仕方ありませんね。

馬場：そうした研究をされている間に、絵に興味を持ち始めたのですか？

大村：私は研究にのめり込んでしまうたちなので、気が減って眠れなくなる夜もありました。そんなとき、買い込んだ絵を眺めていると落ちていくのです。当時買い集めた絵はすべて美術館をつくって収め、故郷の韮崎市に寄贈してしまったのですが、当時私を一番慰めてくれた絵は、未だに手離さず持っています。それが、月賦で最初に買った野田九浦の「芭蕉」という絵です。「芸術は人の魂を救い、生きる力を与えるものだ」と、アウシュビッツ強制収容所の生還者ヴィクトル・フランクル博士が書いておりますように、芸術の持つパワーには、計り知れないものがあります。そういう思いが積み重なって、入院患者を励ます私のヒーリングアートを始めたのです。

馬場：教育についても触れたいと思いますが、創造性を啓発していくという点では東京理科大学も女子美術も同じだと思います。教える上で、重きを置いていることは何でしょうか。

藤嶋：一番大事なことは、感動することだと思います。自然界には不思議なことがいっぱいありますから、常に身の回りのことに関心を持ち、センスを磨いていくことが必要だと学生には教えています。

大村：私は北里大学薬学部の教授を10年務めました。学生は、教科書の内容を覚えさせようとするより、とにかく興味を引くような話から入った方が食いついてきます。その中で「これは」と思ったことを、学生自身で勉強するのが良いでしょう。絵も同じで、教えすぎではいけません。まず興味



東京理科大学専門職大学院 馬場 錬成教授

を持たせることに力を入れるべきであって、細かいことは教えなくていいと思います。

塚本：私も教鞭を執っていた頃は、言われた通りのことを忠実にやる学生より、自らあれこれ考えて工夫し、いろいろな結果を持ち込んでくる学生をかわいがっていました。それが大村先生の言う、何でも教えずぎてはいけないということなのでしょうね。今の教育が一から十まで教えるような感じになっているとすれば、それでいいのだろうかと思います。

大村：女子美の理事長になって、付属の中学・高等学校の卒業制作展を見たときに、どれも同じような絵になっていると気付いたことがあります。これはいけない、教えすぎていると直感しました。それでは個性を萎縮させてしまうんですよね。

藤嶋：オルセー美術館でルノワール、モネ、ゴッホ、ゴーギャンの作品を見て回ると、どれも同じ時期に描かれた絵なのに、それぞれが個性的です。お互いに影響されながらも独創的で、同じにならない。すごいことだと思います。

馬場：教えずぎないという考え方に共感を覚えます。創造性を啓発する教育という点で、何か考えていることはおありでしょうか。

大村：問題を投げかけることでしょうね。こうだからこういう現象が起きるのだと説明するのではなく、「こういう問題についてどう考えるか」と問いかけるのです。自分で考えさせなければいけません。教員だった母の日記に、「教員の資格は、自分自身が絶えず進歩していることである」と書いてありました。教える立場の者が常に進歩している姿を見れば、自然と学生もそうなるでしょう。これが教育者に必要な心構えだと思います。その中で創造性も育つし、学生は若い感受性でいろいろなことを学び取ってくれます。

馬場：態度、実践で見せていくということですね。東京理科大学では「科学文化」という概念を打ち立てました。これは芸術と同じく科学もまた文化であるという考え方ですが、その視点で見ると、女子美と東京理科大学も触れ合うところが出てくるのではないかと思います。



鼎談の様子

大村：芸術作品を見ると「美しいな」と思う気持ちが出てきますよね。それは、数学においても全く同じだと思います。数式の完璧な解き方の美しさに酔いしれるのも、音楽を聴いて素晴らしいと思うのも共通でしょう。だから、科学も文化であることは間違いありません。科学する心は文化の一つだと思っています。

藤嶋：ダ・ヴィンチも科学者であり芸術家ですし、ゲーテも科学者であり哲学者ですよ。

大村：当時の人はそれを分けて考えず、一つの大きな文化としてとらえていたのではないかと思います。

藤嶋：アインシュタインもシンプルで美しい式こそ本物だと言っており、「自然は単純で美しくなければいけない」という言葉を残していますね。



東京理科大学 塚本 恒世理事長

大村：芸術も科学も、感じる心を総合すれば文化であり、分ける必要はないと思います。「科学文化」というのは、実にいい言葉ですね。東京理科大学の意気込みを感じます。今までの流れを汲むだけではなく、自分たちでものを作り上げていく姿勢が必要なのだと思います。歴史や伝統の上に乗るだけではいけません。ダーウィンは、激動の時代に生き残れるのは、変化に対応できる種であると言いました。大きいとか強いとか、賢いとかではなく、変化に敏感に対応していくことこそが、生き残る道なのです。

馬場：私もよく学生に、金や伝統のある企業ではなく、時代に対応できた企業こそが生き残ると話しています。

大村：ただ、どちらかというと大学の先生は変化に弱く、また変化をしようとしないうところがあります。まず教える方が変化しなければいけません。例えば100年以上続いた企業は、100年に一度の危機を乗り越えてきています。創立130年の東京理科大学も同じで、大きな危機を乗り越えてこそ今の東京理科大学があるのです。何が起きても



東京理科大学 藤嶋 昭学長

びくともしないという気持ちを持たなければいけません。

馬場：最後に、女子美と東京理科大学の連携の将来展望や決意表明をお願いします。

塚本：東京理科大学は、理科系の単科大学ですが、理科大学だから理科と数学ができればいいということではなく、もっと幅広い分野の勉強をしなければいけないと思っています。教養科目の先生は非常勤が多いのですが、そういう人材をわざわざ採用するのではなく、他の大学と協力して、大学同士で分野を越えて連携していくことが必要でしょう。美術・芸術の分野は、科学者にとっていろいろな発想の原点でもありますから、女子美との連携でそういったことを実現できればと思っています。

藤嶋：ダ・ヴィンチもゲーテもそうだったように、基本的には科学も芸術も共通していますので、うまく連携していければいいなと思っています。東京工業大学と東京芸術大学も連携しようという動きがあるようです。女子美と東京理科大学も、得意な分野をお互いに出し合うような連携ができるといいですね。

大村：幅広く物事を考えることができる人間を育てるべきでしょうし、そういう点ではサイエンスとアートが連携しあうのは非常にいいと思います。

藤嶋：共通項は「感動すること」です。サイエンスも良い結果が出たら感動するし、美術・芸術も感動を呼ぶものですから、同じですよ。

大村：絵を描いている人たちはどうしてもアバウトになりすぎて、論理的にものを考えられなくなる人が多いのですが、理学をやるとそういうことが勉強できます。一方で、理学ばかりしていると余裕を持った考えができなくなるので、美術を学ぶことで補うといったふうに交流を進めていきたいです。

Lecture ● ショパン・ミュージアム設計のマーラ・セルベット氏講演会開催



2010年3月にオープンした、ポーランド・ワルシャワにあるショパン・ミュージアムを設計したマーラ・セルベット氏（イタリア建築家、本学客員教授）を囲み、天才ショパンの音楽・アートとのコミュニケーションについてのトークショーが本学の同窓会の企画により2010年12月11日、東京大学福武ホールにて開催されました。本学の同窓会長である佐藤和子氏の司会のもと、本学デザイン・工芸学科教授の横山勝樹氏と、本学同窓生のテキストイルデザイナー新井明子氏も交え、興味深い対話がなされました。

マルチモジュール・デザインのアプローチ

セルベット：私が設計の際にとりわけ心を砕くことは、空間と訪れる人との関係性が豊かに発展するような場を作り上げることです。それは、常に人間を中心に据え、建築物の構造、時代と状況の変化を考慮してデザインするという意味です。伝統的な建築は外界から身を守る避難所の役割を果たすものでした。しかし私たちは建築を単なる隠れ家としてではなく、常に外界に対してオープンで、たくさんの発見と発想の源となる空間であるべきだととらえています。

セルベット建築事務所ではこれまで、建築からインテリアデザイン、店舗設計、イベントや仮設展示場、都市計画など多岐にわたる仕事に携わってきましたが、その底流には一つの共通したアプローチがあります。私はこれを「マルチメディアからマルチモジュールへ」と呼んでいます。例えばiPhoneは思わず手に取りたくなるような魅惑的なデザインをしています。そのような双方向性のデザインこそが、最も典型的なマルチモジュール・デザインだと思

ます。つまり、テクノロジーを使って、人間がその肉体感覚と感性の関係性を発展させられるような空間を作り上げるのです。ショパン・ミュージアムの設計も同様のアプローチで行いました。

ショパン・ミュージアムが作られたオストログスキ宮殿は、もともと貴族の宮殿で、第二次世界大戦時に空爆を受けて消失しましたが、1950年代に再建されました。延べ床面積2200平米、3階建ての建物です。そこで展示されているショパン協会の所蔵品は、ショパンが弾いていたピアノ、譜面、手紙など7000点にも及び、一部は世界文化遺産に指定されています。このうち500点が常設展示されており、残りは企画展として順番に展示されます。

物語形式でショパンを語る空間作り

このプロジェクトに関わるにあたって、基本的な着想を得た言葉があります。「変化を語るとき、物語は魅力的かつ効果的になる」。ノーベル賞作家のソールベローのこの言葉から、来場者が新しい体験ができるような、変化に富んだ空間作りを目指したのです。

ショパンを語る文化的形式として、私は物語形式を選びました。単にショパンの人生を時系列で追うのではなく、彼の人生を定めた様々な出来事に焦点を当て、それぞれのパートが集まってショパンの人となりをつむいでいくという構成です。1階はショパンのワルシャワ時代、2階はフランス時代、そして3階はショパンの人となりと死がテーマです。さらに地階では作曲家・ピアニストとしてのショパンを見せています。11の会場構成を考へて展示場を分けたのですが、それぞれの部屋に特定のテーマを設定しており、別々のミュージアムが集合しているかのような作りになっています。

まず、来場者が入場券を入口にかざすと、8つの説明言語と5つの知識レベルを選べる仕組みになっています。ショパンの物語は、彼が生まれ、幼少時代を過ごしたワルシャワ郊外の小さな村から始まります。そこでは、物語と展示物、場所、期間、音楽が重層的に展開するようになっています。ワルシャワ時代のショパンがテーマの部屋では、壁際に資料、中央部分に防音のガラスブースが設置され、その中で好きな音楽に存分にひたることができます。

2階は、パリとノハンにおけるショパンがテーマです。ノハンはショパンの恋人であったジョルジュ・サンドの別荘があった美しい田園地帯で、そこで様々な音楽のインスピレーションを得ています。この空間で目指したことは、音と展示物の共存による音風景（サウンドスケープ）を描くことです。田園地帯の鳥の鳴き声や風の音が彼のイメージソースであったため、これらをBGMに採用しました。机の引き出しを開けるとバーチャルな譜面が映し出され、音楽が奏でられます。それぞれの来場者が引き出しを開けると、異なる音楽が同時に奏でられ、複雑なカオスの世界が広がるようにしました。多くの人が部屋に入れば入るほど音が交錯し、それにBGMも加わりません。それぞれが関連性を持ち、ゆったりとひたるだけではなく重層的に音楽を楽しめる空間になっています。

3階では、ショパンのパーソナリティと旅行の記憶、建築の軀体と構造、来場者と資料という3つの相互作用を心がけました。旅行した場所の写真、ショパンの人となりを示すような写真、身分証明書などが展示されています。「ショパンの死」の展示室には、「ショパンは死んだ。もう音楽はない」というフレーズが書かれています。この悲しい物語を語る空間として選んだのが、黒く細長い形をした無響室です。他の展示室は音や光が溢れているのに対し、この部屋には音が一切なく、自分の話す声さえ吸収されて全く反響が起こりません。そのため、まるで箱に閉じ込められたような感覚を得ることができるのです。展示ケースにはショパンのデスマスクと遺髪と、ショパンの死を報じる各国の新聞が展示されています。

地階は作曲家・ピアニストとしてのショパンを語る空間です。ショパンが実際に弾いていたピアノを展示し、3つの楽譜から1曲を選んで聴くことができます。それによって、選んだ人とショパンとの対話が成立します。また、周囲にいる来場者も同時



にそれを聴いて参加することができます。さらに、現代の有名なピアニストが演奏する手がアップでスクリーンに映し出されます。一人の来場者が選んだ曲を聴き、サウンドスケープを楽しみ、ピアノを弾く手を見る。全員が同時に楽しめる空間となるのです。

誰もが新たなショパンを発見できる空間

全体の設計において最も大事にしたのは、ミュージアムは決して到達点ではない、自分の知識を習得するプロセスの中間点にすぎないというコンセプトです。このミュージアムでは、音楽専門家も、初めてクラシックに接するような若い人も、新たなショパンを発見できます。もっと知りたい、見たいという欲求をかき立て、リピーターとして何度も戻ってくるような、一回で終わらない空間にしたいと思っています。来場をきっかけにショパンのCDを買ったりコンサートに通ったりという広がりも想定しています。

私たちの作るミュージアムは、その街が持つアイデンティティや質を表現する道具にもなります。ミュージアムは、それがあがる街と相互作用をしながら、相乗効果で街自体を活性化させる役割を持っているべきだと思っています。

佐藤：ムセオは都市の道具であるというメッセージが、強く響くお話を聞かせていただきました。ここで、先生方から質問を受けたいと思います。

横山：ショパン・ミュージアムでは、バロック調の美しい建築に現代的な展示デザインが対比的に用いられていました。古典建築と同化するような展示デザインを選択する可能性もあったと思いますが、なぜこのような形を選ばれたのでしょうか。

セルベット：ショパンの時代と関係のない歴史的な建築物と、ショパン自身の物語、そして2010年という時代に合わせた展示という3つの要素を共存させるためには、現代に合った様式でない楽しんでいただけないと考えたのです。建築躯体と展示空



横山 勝樹教授

間が対話するような設計でお互いが物語を語り、活力のある空間を作り上げることができたと思っています。

横山：先端技術を使った展示は、インターネットを通して見ることもできたかもしれませんが、この宮殿でなければ感じられない展示もあると思います。それをデザインの中でどのように実現しようとしたのでしょうか。

セルベット：このミュージアムの中にはい



新井 明子氏



マラー・セルベット氏

くつかの双方向ステーションが設置されていますが、ハイテクを前面に出すのではなく、あくまで音風景の中に自然に融合する形で設計されています。テクノロジーには素晴らしい潜在能力がありますが、同時にすぐに古臭くなってしまいうという問題があります。ですから、最先端技術を導入しつつ、その向こうにあるミュージアムの価値は変わらずに知識・体験という財産が残る構成になっています。

新井：このミュージアムは今までにない、五感のすべてに訴えるコンセプトになっていますので、総合的にショパンを捉えることができます。その中で、ショパンの何を一番表現しようという観点で設計されたのでしょうか。

セルベット：このミュージアムは、来場者はそれぞれ知識レベルも違うし、興味関心を持っている分野も違う、一人一人が異なる人間であるということ念頭に入れて設計しました。様々な切り口から多様なショパンを表現することで、それぞれの好奇心を刺激し、自分の知りたいところにじっくりと時間をかけて鑑賞し、自分なりのショパン像を作り上げてほしい、一方的なショパン像を提示するのではなく、自らで発見



してほしいという思いを込めました。

新井：そういう在り方が、これからのムセオの在り方になっていくのでしょうか。

セルベット：私は、すべてのミュージアムに共通する絶対的な基準や理想の姿というのはないと思っています。なぜなら、それぞれのミュージアムは、それぞれのテーマや伝えたい内容、立地する地域のコンテキストの上で立てられるべきだからです。ただ、個々の知識の度合いによって情報レベルを選べる仕組みは採用した方がいいと思います。また、滞在時間が長くて短くても、帰るときに心が豊かになって知識も増えたと思えるような仕組みが必要だと思います。

横山：若いデザイナーや今後デザイナーを目指す人に向けて、今のデザイン活動に最も役立っていると思うことを教えてください。

セルベット：デザイナーとしてのキャリアに大切なことは、素晴らしい師を持つことに尽きます。私も師であるアキッレ・カスティリオーニを通じて、自分が持っていなかった新しい視点でものを見ることを学びました。また、彼は固定した様式を決して作らず、施主の注文に従い、毎回新しいスタイルの作品を作り上げてきました。常に使う人の行動様式を想定したデザインになっているのです。そこから学んだことは、今の私の仕事でも非常に役立っています。

新井：女性が仕事を続けていくに当たって何が大切な、サジェスチョンを与えていただければありがたいです。

セルベット：仕事に情熱を持ち、良いパートナーを得ることでしょうか。私の夫は建築家で、同僚であり夫婦であり、クリエイティブで素晴らしい時間も家事という辛い仕事も共有できています。アーティストや建築家、デザイナーには、プライベートと仕事の垣根がありません。決まった時間がなくルーチンワークでもないのが、生活の全てが糧となり、インスピレーションの源になります。ですから、情熱と好奇心、興味を持ち、生活からどれだけのものを吸収し、一つの融合した世界を作り上げられるかということが重要だと思います。

Graduation ● ① 女子美スタイル☆最前線 2010



2月11日から14日、「女子美スタイル☆最前線2010」が開催されました。本展覧会は、芸術学部、短期大学部、大学院の卒業・修了制作作品の中から、キュレーターチームが選抜した作品を横浜 BankART Studio NYK 全館をつかって展示するものです。

展覧会初日、2月11日に行われたオープニングイベントでは、清水靖晃&サキソフォネッツのジャズ演奏にあわせて、佐野ぬい学長がライブペインティングを行いました。また、7名の審査員から7名の学生に贈られる「JOSHIBI rainbow award」と題した賞が発表され、授与式が行われました。



「JOSHIBI rainbow award」授賞式

Violet Prize : 杉田敦氏 (美術批評家/本学教授)

「身体とエネルギー」
小口菜緒実 (デザイン学科)



寸評：エネルギーが溢れている。どういう形で表現しているのかまだ定まっていない。絵画なのか、インスタレーションなのか。あまりしっかり形になる前のそのエネルギーを失わないで、今後も制作に携わってほしいです。

Yellow Prize : 小山登美夫氏 (小山登美夫ギャラリー/明治大学国際日本学部特任准教授)

「塵」(作品画像はP.14)

片野彩 (デザイン学科)

寸評：絵画でもイラストレーションでもなく自由な発想で制作されています。彼女の思った言葉が素直に描かれていました。それとテントの中に入って、近い距離で作品を観るとというのが面白い。描かれているものから、わくわくするような思いが、見ている人に伝わってくる点がいいと思います。

Green Prize : 葛西薫氏 (アートディレクター)

「ひやくまん色の世界」

大波多麻子 (デザイン学科)



寸評：映像作品です。女子美ですから、女の人が作っているはずなのですが、男の人が作っているんじゃないかと思うような作品です。タイトルには「ひやくまん色」とありますが、作品にはほとんど色がなく、静かな作品です。黒い線だけで構成されていて、作品の中の人には物事がほとんど何も起こらない。本当に静かな世界なのですが、そこに出てくる人が何を考えているのか、なんとなくわかるような、わからないような、そんな作品です。

Orange Prize : 曾我部昌史氏 (建築家/神奈川大学工学部教授)

「Human Constellation」

石原佳世 (デザイン学科)



寸評：人間のほくろの位置を星座の形に翻訳して表現した作品。こういう審査をしていると自分がどういうことに興味をもっているかが選ぶ作品に表れると感ずります。彼女の場合は、人間のほくろの位置を観察した結果を星座に表現している。翻訳の仕方の背景にあるのは「人間の身体は宇宙だ」というところ。観察からアウトプットまでの物語が気持ちがいいし美しいです。

Blue Prize : 横山勝樹氏 (本学教授)

「明日も、ぶどうの園で。」

越知翔子 (芸術学科)



寸評：障害者のためのぶどう園を運営している作者自身のおじいさんを取り上げた、ドキュメンタリー作品です。人間は皆、生かされているということを改めて感じました。人と人のかかわりを感じる、観た後に温かい気持ちにさせる作品です。女子美としての表現の幅の広がりも感じました。

Indigo Prize : 佐野ぬい氏 (洋画家/本学学長)

「≡≡≡≡≡≡01」「≡≡≡≡≡≡02」

「≡≡≡≡≡≡03」(作品画像はP.13)

福井裕子 (短大 美術コース絵画)

寸評：粘り強く取り組んだところに惹かれました。まっすぐ福井さんの道を歩いていってください。福井さんの作品は、私には絶対に真似できない。私は、自分ではできないことに惹かれます。すごい時間をかけて、1年ぐらいかけたのではないかと思わせる作品です。制作の過程を記録したファイルも見ました。1枚の絵に渾身こめて描いている様子がわかりました。これから、何をやるにも、人生生きていく上でこの制作態度を守っていてもらいたいと思っています。

Red Prize : KIKI氏 (モデル)

「ぶちぶち、はじける！いくらえのぐ」

野田桐子 (デザイン学科)



寸評：子どもを対象にした絵具の作品です。絵を上手に描くのではなく、絵を描く楽しみを伝えるというアイデアで作った作品。プロダクトとしての可能性を感じさせる素敵な作品です。「商品」と言ってもいいレベルだと思いました。

Graduation ● 2 「女子美スタイル☆最前線2010」ギャラリー・トーク

「女子美スタイル☆最前線」のギャラリー・トークが展覧会のコーディネーターとなった杉田 敦教授(芸術学部美術学科芸術表象専攻)によって2月13日に行われました。多くの方にご参加いただき、展示についてのさまざまなお話を伺うことができました。

■First Floor

今日はギャラリー・トークにお集まりいただきましてありがとうございます。全部の作品についてお話しすることは難しいのですが、展示に際して、どのように心がけて準備したのかなどについてもお話しできたらと思います。



入口を入ってすぐの部屋はファースト・コンタクトの場所なので、手取り早く女子美らしさがわかる構成にしようと思いました。入って正面にあるデザイン学科ヴィジュアルデザインコースの橋本愛美さんの壁面イラストは投票でも人気を集めました。柔らかくて、かわいらしい作品です。立体アート学科の塚田晶子さんの木の箱の作品は中をのぞけるようになっています。短大専攻科デザインコースの小西佳奈子さんの作品は島の環境設計で、段ボールでつくったエスキースも壁に展示しました。

1階の奥の部屋の正面には、ひとつの中心をつくりたいと思い、短大の美術コース彫塑の西川祥子さんの地面に横たわる人物の作品を置きました。この部屋はコンクリートむき出しでとてもハードな空間なの

西川 祥子
「触れられたくないところに
触れられそうになって不機嫌になる」



ですが、西川さんの作品は力強くて、ハードさに負けずに、ピッと空間の中心になっています。西川さんの傍らには工芸学科ガラスコースの松村更紗さんの繊細な作品があって、両者が並んで置かれているのが良い効果になっています。短大専攻科美術コースの市川陽子さんの作品は印象的です。このような具象の作品はめずらしいですね。写真では見慣れている風景ですが、こういう風景も油彩の作品になるということにあらためて気づかされました。

市川 陽子 「境界」



1階の展示はバリエーションが豊かで、メディアアート学科の園田智恵子さんは指示書のあるインタラクティブな作品です。伝統的な彫刻の作品や具象の絵画から、メディアアートの作品まで、女子美の特長を概観できるのではないのでしょうか。

■Second Floor

2階はバンク・アートの中では床がきれいで、そんなにハードではない空間です。デザイン学科プロダクトデザインコースの城田美帆さんの椅子の作品は、搬入の時に座らせてもらったのですが、とても座り心地も良くできています。大学という限りある時間の中でこれだけのクオリティの作品を制作できたのはすごいですね。

デザイン学科ヴィジュアルデザインコースの足立真理さんの陶器の薄片で構成された印象的な作品です。陶器は、ひとつひとつゆるやかにカーブしていて、いろいろな

城田 美帆 「mocc」



模様もあってとてもきれいです。もともと人間の肌に沿うように曲面でできていますが、展示では平面に展開させました。実家の多治見の窯元の職人さんとの共同作業という側面もあります。

足立 真理 「陶肌一トウハダ」



今回のレインボーアワードでキキさんが選んだデザイン学科プロダクトデザインコースの野田桐子さんの「ぶちぶち、はじける!いくらえのぐ」は、人工いくら製の製造技術をつかったものです。絵の具の入ったいくらを手でつぶしながら絵を描くというもので、とてもユニークですぐれた作品だと思います。

短大美術コース絵画の福井裕子さんの作品はレインボーアワードの佐野ぬい学長の賞に選ばれました。福井さんから一言お願いします。

「この作品は色の重なりを描くことで、ものの重なりや時間の重なりを考えました。重なった時に見えるおもしろさがありました。すごく集中して描くことができた作品です」(福井)

福井 裕子「=====01」
「=====02」
「=====03」



デザイン学科ヴィジュアルデザインコースの石原佳世さんの作品は建築家のみかん組の曾我部昌史さんが賞に選出しました。人の身体のほくろの位置を結びつけて星座のように表現した作品です。とても味わい深い良い作品ですね。石原さんから一言お願いします。

「ある日、22年生きていて自分のほくろの

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN



石原 佳世さん

位置を知っている人っているのかな、と思いました。自分でも知らない自分の身体の中に神秘性と存在感を感じて、つくってみようと思ったのがこの作品です。ほくろをつかって十人十色を表現しました」(石原)

■Third Floor

3階の最初の部屋は、暗い方が映えるような作品を展示しています。今年は初めて映像作品のためのブースもつくりました。映像の中からは2つの作品がレインボーアワードに選ばれました。

アートディレクターの葛西薫さんはデザイン学科ヴィジュアルデザインコースの大波多麻子さんのアニメーション作品「ひやくまん色の世界」を選びました。現代の生活の中で人と人が争っていることを示唆する印象的な作品でした。芸術学科の越知翔子さんの「明日も、ぶどうの園で。」はドキュメンタリー作品です。彼女のおじいさんは、障害者が労働して生活するぶどう園を設立・経営していました。ご高齢で身体が弱っているおじいさんとの対話や、彼とのかけがえのない時間を丁寧に記録しています。環境デザイン専攻の横山勝樹先生が賞に選ばれました。

片野 彩 「塵」



デザイン学科ヴィジュアルデザインコースの片野彩さんの白い布でできたテントの作品「塵」は、中に入るとびしりと絵が描かれています。小山登美夫さんがレインボーアワードに選んでいます。片野さんから一言お願いします。

「この作品は、イラストとペイントと一緒に置くとうなるかを試してみたてつくった作品です。イラストは意識して描くもので、ペイントは無意識で描くものではないかということを考えていて、ひとつの研究過程のようなものです」(片野)

デザイン学科ヴィジュアルデザインコースの小川菜緒実さんの「身体とエネルギー」は、小部屋にいろいろな要素を入れ込んだ作品です。自分が体験する映像や写真、ものをつくりたいんだけど、どうやってつくったらいいんだろうという悩んだプロセスが表現されていて、現代美術のエッセンスを感じさせます。僕がレインボーアワードに選びました。

■Performance Space



3階の奥の部屋は、朝倉摂さんの展覧会の際に仮設された、木造の回廊がそのまま残されていて、それを利用しようということになりました。オープニング・パーティーでは、その中心で学長がライブペインティングをしました。

通路の上の部分は高さもなく、排気口のダクトもあって悪条件ですが、あえて洋画専攻版画コースの菅野真穂さんの版画の作品「PARADOX」を展示することにしました。これは1972年のヴェネチア・ビエンナーレのドイツ館において、ゲルハルト・リヒターが行った48の肖像画を一直線に並べたインスタレーションを想定したもので、佐野先生を、学生の代表として菅野さんの制作した30の瞳が見つめているというかたちをつくりたかったのです。

通路の下の階層には洋画の大学院生にお願いして、みんなのアトリエの雰囲気再現してもらいました。一見ラフで、だらしくも見えますが、いろいろ考え試行錯誤している様子も伝わってきます。中央でパフォーマンスを行う佐野先生も、かつては



杉田 敦教授

女子美の学生で、今学んでいるみなさんと同じように、表現者として、創造への不安を抱いていたはずで、学生たちと、一人の表現者になった佐野先生とのつながりを表現したかったのです。

今回の展示では、「関係を築く」ということを意識している作品が多かったのではないのでしょうか。3階の中央の部屋に、デザイン学科プロダクトデザインコースの中田愛子さんの「つながりのかたち」という作品があります。これは彼女が制作した狛犬

中田 愛子 「つながりのかたち」



を各都道府県の協力者に送って一緒に作品を撮ってもらうというもので、人と人のつながりの上に成立する作品です。これは、ニコラ・ブリーオーという評論家が、世界中で読まれた著書『関係性の美学』という本の中で言っていることでもあります。その、いわば最新の理論が、デザイン学科のプロダクトデザインという実践的な制作を重視する場にも浸透してきているということは、展覧会全体の中でひとつのキーとなる出来事だと思います。かつてアーティストは、ひとりでアトリエにこもって外界を遮断して制作に没頭する存在でしたが、今ではアーティストもデザイナーも、人と人の関係性を見つめ、その上で自身の活動を研ぎ澄ませていくという存在になりつつあるのでしょうか。いずれにしても、そうした考えを独自のやり方で解釈、展開して見せてくれる若い才能には、展示をディレクションする側もいろいろと教えられました。では、せっかくなのでいろいろなソファも置いてありますから、話の続きは、そこに腰かけながらということにしましょう。今日はありがとうございました。

Topics ● ① 曾根 裕展 キュレーター 遠藤水城氏 公開レクチャー

1月21日、芸術学部美術学科芸術表象専攻研究室の主催でキュレーターの遠藤水城氏の公開レクチャーが行われました。遠藤氏は1月15日から3月27日まで東京オペラシティ アートギャラリーで開催された曾根裕展「Perfect Moment」を企画されました。展覧会に合わせて実施されたこのレクチャーでは、ロサンゼルスに拠点を置きながら国際的に活躍する曾根裕氏の作品と背景について、遠藤氏自身が曾根氏の中国とメキシコのスタジオを訪れた経験から解説していただいたほか、自身の過去の仕

事を例にあげながら、キュレーターの役割について独自のキュレーション観を語っていただきました。現在の「キュレーション」のイメージはある時代に固定されたものであり、自分はそれを壊していきたいと語り、システム化された現代美術をめぐる状況に意義を唱え、異なるキュレーションの方法論を自身の体験に基づいて提示する遠藤氏のお話は、学生や聴講者の興味を強く引き、レクチャーの後には聴講者からの様々な質問や感想が後を絶ちませんでした。



Topics ● ② 三菱一号館美術館 高橋明也館長 講演会



昨年の12月7日、三菱一号館美術館の初代館長、高橋明也氏の講演会が相模原キャンパスにて行われました。氏は国立西洋美術館で研究員、主任研究官、学芸課長をさ

れ、パリ、オルセー美術館の開館準備室にも客員研究員として在籍された方です。

タイトルは「新しい美術館・新しい街—美術のサ・エ・ラー (here and there)」。

今まで手掛けてこられた数々の展覧会を中心に、氏の生い立ちや研究員になられた経緯など、子ども時代の海外での写真画像も見せていただきながらの講演となりました。

三菱一号館美術館が明治期の建築を再現しており、美術館仕様の空間ではないがゆえのご苦労や、西洋美術館で手掛けられた

「バーズ・コレクション」の6時間待ちの驚異の行列のエピソード、現代アーティストのジェフ・クーンズが所有しているマネの作品を「マネとモダン・パリ」展で借り受けた話などは現場に関わっている方ならではの。「アンリ・ルソー展」「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展」「コロ展」・・・と多くの入館者を動員した展覧会を手掛けて来られた氏の話は次々と続き、美術館がなぜ無料にならないのかという興味深い話も飛び出し、あっという間の1時間半でした。

Topics ● ③ デザイン・工芸学科 ヴィジュアルデザイン専攻 集中講義「文字のはなし2」報告



1月12日、デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻の集中講義として、タイプデザイナーの方をお招きして「文字のはなし2」が行われました。

午前の部には株式会社タイプバンクの高田裕美さん（本学卒業生）と増田浩之さん、午後の部には有限会社字游工房の鳥海修さんにお越しいただきました。

2年生対象の午前の部では、書体の基礎知識、タイプデザイナーのお仕事、「文字のバランスがいいのはどちら？」というペーパーテストを通してお話いただきました。

【学生の感想から抜粋】

- ・タイプデザイナーの方が一つ一つ文字を作っていることを知り、文字を大切に使うと思いました。
- ・日常の中でも文字を意識して見るようになりそうです。
- ・課題でいつも自分なりに文字組みを考えています、今回のお話を参考にしたいと思いました。

1・3年生対象の午後の部では、書体やタイプデザインの魅力のお話や、会場で実際に鳥海さんにレタリングをおこなっていただきました。

【学生の感想から抜粋】

- ・鳥海さんのお話される様子から、文字を作ることが本当に好きだということが伝わってきました。
- ・微妙な何ミリ単位の修正を何十回と行って文字ができていくことを知り、奥深い仕事なんだなと感じました。

学生一人ひとりが、文字について考えるとても良い機会になった講義でした。



午前の部：お話をされる(左から)高田さん、増田さん



午後の部：書体見本をみんなで一斉に開きます

写真撮影：寺林真代／河面法子

Topics ● 4 「b・tanぬぐい」パリ展 パリで学生デザインの手ぬぐいの展覧会



「注染手拭プロジェクト」と「手拭 B 反プロジェクト」は、教育 GP の3年目を迎え、2月8日から2月19日までの12日間、フランス・パリのアトリエ・ビスコンティで「b・tanぬぐい」の2回目の展覧会を開催しました。

これは2010年4月、紀尾井アートギャラリーで開催した1回目の展覧会の時に、テキスタイルや日本のクラフトを扱うパリ在住のデューラーが見えて、「ぜひパリで紹介したい」とおっしゃってくださったことが



ら始まりました。数あるパリのギャラリーの中で、一番に興味を示してくださったのが建築家でもあるこの画廊のオーナーです。このお二人の協力の元でパリ展が実現しました。

「アトリエ・ビスコンティ」はセヌ川の左岸、パリの画廊街のセヌ通りと国立パリ美術学校があるボナパルト通りを繋ぐ通りにあります。前も隣も画廊という静かでゆっくりと作品を鑑賞できる場所で、地元の人々やアーティストがよく通ります。12日間の展示中でも、外から見て興味を示してくる人が大勢いました。

古い建物を生かしたパリの画廊は一階と地下に展示スペースを持つことが多く、入り口の幅に対して室内は奥行があり、特に地下は広い面積を持っています。この画廊の専門が現代絵画の画廊であることにヒントを得て、展示は壁面や空間一つ一つをキャンバスに見立て、大きな絵を見るよう



にしました。DMは、このプロジェクトに3年間参加して、今は4年生になったヴィジュアルデザイン専攻の石川果菜さんが担当し、パリや印刷屋とのやり取りの全てを行い、第1回展のイメージをさらに発展させ、幅広大判のパリ製と縦長大判の日本製の両方を作成しました。

会期の3日目にレセプションが開かれ、画廊の顧客やパリ在住の卒業生やパリのテキスタイル関係者が大勢集まり、賑やかなパーティーが開かれました。プロジェクトの主旨や注染とB反のフランス語版説明文を読んだパリの人々からは、「伝統染色である注染の魅力を知り、これを生かした学生のB反や手拭のデザインは日本でしかできない“日本のテキスタイル”である」と絶賛されました。この様子は2月21日付の織研新聞に取り上げられました。

(デザイン・工芸学科教授 大澤美樹子)



写真: 坪 邦信

Topics ● 5 短大GP シンポジウム「障害理解とアートフィールド参画支援の取組」



短期大学部では2009年度より文部科学省選定事業として「障害理解とアートフィールド参画支援の取組」をテーマに、障害理解の困難さを学ぶことを通じて学生自身が成長することを目的とし、多くのプロジェクトを実施してきました。このたび、その総括として報告展覧会とシンポジウムを開催。2月12日に女子美アートミュージアム（相模原キャンパス）で行ったシンポジウムでは、インクルーシブデザインに取り組む塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准

教授）、ハンディキャップを抱える方々と版画を通じてコラボレーションを行う島野芳子氏（ニューメキシコ大学准教授）、杉並区内福祉作業所で制作支援を行う齋藤朋子氏（杉並いすみ第二（方南））、鹿児島県の障害者支援施設で創造的な制作活動の支援を行う福森伸氏（しょうぶ学園施設長）を講演者として迎え、様々な立場から障害のある方とのコラボレーションや支援を通じての事例をご報告いただきました。「わかる」「理解する」ことが何かを考え、今後の教育や学生参加型プロジェクトに対し、意義を明確にして実践していくきっかけとなる内容でした。また展覧会は、国内外より収集したポスターやクラフト系の作品を一堂に展示すると共に、授業や課外プロジェクトの成果発表も行い、期間中は同テーマに関心の高い来場者で賑わいました。

(短期大学部部長 小川 正明)



Topics ● 6 相模原市電気自動車ラッピングデザイン



導入式(左から、加山市長、田口さん、武さん)

2010年4月に政令指定都市となった相模原市は、「潤水都市さがみはら」というキャッチフレーズを立ち上げ“水と緑に恵まれ、市民の心が潤いに満ちた活気溢れる街作り”を目指し、今年2月、環境に優しい電気自動車(Electric Vehicle)を公用車として導入することになり、市民へのアピールも含め車体のラッピングデザインを行うことになりました。そこで、デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻に依頼があり、学生に公募したところ40数点のデザイン案の応募があり、専攻内選考の

上、10点を市に提出しました。環境政策課が中心となり、三区(緑区、中央区、南区)の意向も含め審査した結果、下記の3案に決定し、2月3日に実際にラッピングされたEVのお披露目も含めた「導入式」が市役所本庁で行われ、市長・三区長・関係者から大変な賛辞と感謝をいただきました。

(デザイン・工芸学科教授 田村俊明)

- 緑区 武美里さん
(デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻2年)
青と緑の“虹”で潤水の流れを表現し、市花の「紫陽花」をポイントに鮮やかでシンプルなデザイン。
- 中央区 田口こずえさん
(大学院デザイン専攻環境造形1年)
都市と自然の調和・融合をテーマに、街のシルエットに、潤水の「青」、自然の「緑」、市花の紫陽花の「紫」の3色で表現したデザイン。
- 南区 木皿千智さん
(デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻2年)
「木々がそよぐ風」「緩やかに流れる潤水」の流れを、軽やかな曲線と爽やかな色彩で表現し、自然環境との調和を“サークル”で表現したデザイン。



緑区



中央区



南区

Topics ● 7 高山村のオリジナルアイスクリームを企画・製造

長野県高山村、須高ケーブルテレビ(株)と女子美術大学の産学官連携プロジェクトでは、高山村内のNPO法人桜湯里と社会福祉法人夢工房福祉会とのコラボレーションで、2種類のオリジナルアイスクリームを企画・製造しました。ベースは高山村産の原乳を中温殺菌した「こだわりの牛乳」を100%使用したもので、「りんご」アイスは高山村産の紅玉を加工したりんごソース使

用した、さわやかな果肉入りのアイスクリーム。「栗かのこ」アイスは周辺の名産である栗かのこを使用して、栗の風味を卵黄で引き立てたアイスクリームです。レシピはメディアアート学科3年生の授業で開発したもので、パッケージデザインも学生たちが提案した15点の作品の中から選ばれました。女子美プレミアムアイスクリームは、女子美祭と女子美110周年記念レセプ

ションで試食され、好評を博しました。

(アート・デザイン表現学科教授 羽太 謙一)



Topics ● 8 えどがわ伝統工芸2010「新作発表会」

えどがわ伝統工芸産学プロジェクトでは、毎年、江戸川区の伝統工芸者の指導のもとで、女子美術大学、多摩美術大学、東京造形大学の学生たちが、新しい伝統工芸の作品を企画・デザイン・制作・販売しています。プロジェクトは毎年4月の説明会から始まり、5月の発会式、6月のデザイン

提出、10月の試作品提出、12月の写真撮影、1月の新作発表会と長期間にわたります。第8回目を迎えた本年度は、女子美術大学芸術学部から29名の学生が、女子美術大学短期大学部から8名の学生が、鍍金、江戸風鈴、つりしのぶ、江戸扇子、型小紋、組子建具、漆芸の7つの分野で作品を完成

させ、1月21日から23日までの3日間、江戸川区にあるタワーホール船堀にて新作発表会を行いました。また、2月1日から4日まで東京ビッグサイトで開かれたギフトショーにも出品しました。

(アート・デザイン表現学科教授 羽太 謙一)



会場風景



型小紋



江戸扇子

2010年度クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート 海外スプリング・スクール 報告



大学と短期大学部の学術交流協定大学である豪州グリフィス大学クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート（以下QCA）において、1月22日から2月20日までの間、海外スプリング・スクールが開催されました。このスクールは、本学とQCAが共同で企画した美術・デザイン実技授業を中心に構成されており、今年で第4回目の実施となります。参加した芸術学部生5名は出発前にオリエンテーションと英語研修を受講し、スクール参加に備えました。現地では次の8つの課題（プロジェクト）に取り組まれました。

グループ交流・自己紹介プロジェクト

二人一組になって外から見た相手のイメージを互いにドローイングしあって交換し、次に内側からとらえた自分自身の特徴を描き加えます。日本から持参した家族の写真や自分らしさ（アイデンティティ）をもたらす素材も使って、他者と自己の両面からみたポートレートを作り上げました。

グラスハウス山プロジェクト

QCA学生も参加したこの課題では、ブリスベン郊外のグラスハウス山とサンシャインコーストを訪れました。アボリジニーの言い伝えが残る珍しい形の山々や周辺の森、浜辺を探索し、自然から得たイメージをスケッチブックや写真に収めたり、落ち葉や貝殻を集めたりしました。大学に戻ってから、集めた情報や材料を使って、山や海の風景、それらの色や光から得た印象を自由に表現しました。



ジュエリー・プロジェクト

豪州滞在の印象や自分が好きなものモチーフにデザインをして、銀、銅、真鍮、アルミニウムでアクセサリを作ります。複数の金属や加工技術を組み合わせながら、動物や植物など様々な形の作品が完成しました。



インディジネス・アート・プロジェクト

インディジネスとは先住民を意味し、アボリジニー独特のアートである「メモリー・ボックス」を制作します。講師より先住民の歴史やボックス制作の基本的な考え方の説明を受けた後、小さな箱の中に家族の歴史や風習を表す写真やものを配置しながら、家族と自分とのつながりを表現する独創性の高い作品を完成させました。



版画プロジェクト

モノ・プリント技法とドライポイント技法を修得した後、二つの技法を組み合わせたり、レースや植物など立体的な素材を使ったりして、数多くの版画を刷り上げました。



屋外プロジェクト

ブリスベン中心部にある植物園を訪れ、ガイドから園の成り立ちや植物の説明を受けながら園内を探索します。特に、豪州特有の植物の葉や種や幹に見られる繰り返しの形のパターンやリズム、模様に着目してスケッチや写真撮影をし、修了制作へのアイデアを溜め込みました。



コレクター・ギャザラー・プロジェクト

リサイクル・アートに挑戦する課題です。ガラクタのように思える各種部品やセカンドハンドの古い物を破格の値段で売る店に出かけ、制限額内で材料を購入しました。かつては別の役割を果たしたこれらのパーツを組み合わせ、新たにユニークな立体作品として蘇らせました。

修了制作

これまでの授業や文化小旅行で体験してきたことを基に、集大成の作品を制作します。修了作品展会場にはQCAの講師陣、学生、スタッフやホストファミリーなど多くの人々が訪れ、賑わいました。最終日には、学生の口頭発表と講師による講評の後、QCA学部長から修了証書が手渡されました。続いてお別れパーティーが催され、お世話になった方々との別れを惜しみました。アットホームな学習環境の中で築かれた学生と講師の信頼関係やQCAで得た知識と技術は、今後世界へ羽ばたいていく学生の糧になることでしょう。（国際センター）



第11回パリ賞受賞者

アーティスト 田口 一枝さんエッセイ



19歳、女子美の春のヨーロッパ美術旅行に参加した時に、ノートルダム大聖堂のバラ窓に圧倒させられた。当時、油絵科の学生だった私がスタンドグラスから受けた印象はまるで生きている絵。と言うのは、スタンドグラスは差し込む光によって非常に表情を変えるもので、同じスタンドグラスでも、朝・昼・晩、もしくは晴れた日、曇りの日では全く違ったものに見える。また、多くのスタンドグラスは、聖母マリアやキリスト、聖人を表現した具象画だったが、そのガラス絵から強く差し込んだ太陽の光が作り出した色彩の光は抽象的なもので、大聖堂の壁面や床に投影されていた。荘厳な大聖堂の空間は、私にとって光の芸術以外の何物でもなかったのである。それ以来、作品に光という素材を取り入れている。光は音の様に無形なものだが、その効果は私たちの生活においてとても深いものだ。それを素材とし、自分が見たいと思う光の世界をインスタレーションの手法を用いて表現している。

パリ。これほど美しく歴史的な都市に住むのは初めてだ。街を歩いていると、いろいろなインスピレーションを受ける。そこで感じたものを、自己の作品へと投影させ

ている。アトリエのあるマレ地区には、沢山の画廊があり世界中のアートが集まっている。制作の合間にとっても良い散歩コースだ。

世界中のアーティストが大勢滞在する国際芸術都市では、様々なジャンルの人に出会った。先日、私の光の作品と即興音楽家たちとのコラボレーションで、私のアトリエでコンサートを行った。音楽家とのコラボレーションはとても貴重な経験となった。2月には光を使った舞台美術をベルリンのソフィエンザール劇場で担当させていただいた。私にとって、初めての舞台美術だった。普段、ギャラリーや美術館の展示では初日から最終日まで展示内容が変わることはないが、今回、舞台美術ということで、時間ベースで舞台が変わり、自分の作品もその度、変化して見せられたのがとても新鮮だった。また10月に、神奈川県民ホールギャラリーでの企画展「日常・ワケあり」で光のインスタレーションを3点発表することになった。横浜は女子美に近いので、女子美のみなさんにパリでの成果を会場で見ただけならとても嬉しく思う。



アトリエから見える風景
(ノートルダム大聖堂が目の前です)



(上)作品イメージ:silver silence
(下)ベルリン・ソフィエンザール劇場で光を使った舞台美術 ピアニスト:高瀬アキさん

プロフィール
1975年 茨城県生まれ
1997年 女子美術大学芸術学部洋画専攻版画コース卒業
2003年 パルセロナ・ガラス・センター修了
2005-2006年 文化庁新進芸術家海外留学制度によりバージニア、アメリカ滞在
2007年 バージニア・コモウエルズ大学大学院ガラス科修了
2007~2008年 財団法人ポーラ美術振興財団在外研修員
2010年 レジデンス Lower Manhattan Cultural Council, Swing Space (ニューヨーク)
レジデンス Cite Internationale des Arts Paris 女子美パリ賞

主な個展
2004年 ギャラリー・Fila5 (マドリド・スペイン)
2007年 ヘントリッシュ・デュッセルドルフ美術館 (デュッセルドルフ、ドイツ)
2008年 アルコルコン・ガラス美術館 (マドリド、スペイン)
主な展覧会
2006年 「ボンベイ・サファイア」 オールドトゥルマン・フレウエリー (ロンドン)
2007年 「Licht/Light」 ローシュ・サイデル・ギャラリー (ベルリン、ドイツ)
「Young Glass」 エベルトフト美術館 (エベルトフト、デンマーク)
2008年 「Aquifer」 エディソン・ギャラリー (ワシントン)
2009年 「(In) tangible」 ボリクアギャラリー (ニューヨーク)
DUMBO アートフェスティバル (ブルックリン、ニューヨーク)
2010年 2人展 PS122ギャラリー (ニューヨーク)
「Recicla Madrid」 コスモ・カイシャ科学館 (マドリド、スペイン)
2011年 舞台美術 「Chaconne」 ソフィエンザール劇場 (ベルリン、ドイツ)

NEWS ●●●

100周年記念大村文子基金

平成22年度 女子美美術奨励賞

女子美美術奨励賞(付属高校・中学校生対象)は本学付属生徒の美術活動を奨励する賞です。以下の通り本年度の受賞者が決定しました。

高校生受賞者

3年松組 上野 ゆめ子
3年菊組 栗村 祐衣

中学校生受賞者

3年梅組 古谷 恵莉子

◇100周年記念大村文子基金募集について

同窓生を対象に、制作・研究活動の奨励等を目的とした「女子美パリ賞」「女子美ミラノ賞」「女子美制作・研究奨励賞」を毎年募集しています。募集受付期間等の詳細については、本学ウェブサイトをご覧ください。

URL : <http://www.joshibi.ac.jp/campuslife/incentive/foundation.html>

【お問い合わせ先】

杉並学生支援センター TEL : 03-5340-4507

E-mail : ecp-j@venus.joshibi.jp

相模原学生支援センター TEL : 042-778-6614

E-mail : ecp-c@venus.joshibi.jp

2010年度 卒業(修了)制作展

短期大学部・芸術学部・大学院



●平成22年度 卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞 受賞者(短期大学部)

【卒業制作賞】

【造形学科】美術コース	(絵画)	金 秀珍	(彫塑)	福井 裕子 伊藤 里歩
【造形学科】デザインコース				佐藤 ゆかり 室井 麻理
・情報メディア系				清水 美加
・空間インターフェイス系				菊地 香菜 奥田 美由紀 太田 彩乃
・クラフトデザイン系				
(陶芸・メタル)				
(テキスタイル)				
(刺繍)				

【専攻科】造形専攻

・美術コース	(絵画)	市川 陽子
・工芸デザインコース		
(陶芸・メタル)		重田 真希
(テキスタイル)		吉野 かほり
(テキスタイル)		土田 奈央

【優秀作品賞】

【造形学科】美術コース	(絵画)	塚田 智子
	(絵画)	南保 理沙子
	(絵画)	駒井 里江
	(彫塑)	西川 祥子

【造形学科】デザインコース

・情報メディア系	甲斐 希世乃
	野崎 瑞貴
	平井 万莉乃
・空間インターフェイス系	大久保 和恵
	桑山 昌代
・クラフトデザイン系	
(テキスタイル)	板谷 真理
(刺繍)	島津 尚子

●平成22年度 卒業制作賞・優秀作品賞・卒業研究賞・優秀研究賞 受賞者(芸術学部)

【卒業制作賞】

【絵画学科】洋画専攻	(絵画Ⅱ)	朝倉 優佳
	(版画)	下河 智美
	(絵画Ⅰ)	渡邊 奈菜
【絵画学科】日本画専攻		谷中 美佳子
【工芸学科】	(陶)	奥村 巴菜
【立体アート学科】		高橋 彩
【デザイン学科】	(ヴィジュアルデザイン)	大熊 千紗
	(環境デザイン)	齋藤 桃子
	(ヴィジュアルデザイン)	橋本 愛実
	(ヴィジュアルデザイン)	衛藤 麻美
【メディアアート学科】		加藤 広子
		廣瀬 有紀
		本田 智絵
【ファッション造形学科】		大八木 富士奈

【卒業研究賞】

【芸術学科】	越知 翔子
--------	-------

【優秀作品賞】

【絵画学科】洋画専攻	(絵画Ⅱ)	飯山 由貴
	(版画)	中川 陽香
	(版画)	中西 愛
	(絵画Ⅱ)	齋藤 はるか
【絵画学科】日本画専攻		高山 真衣
		横山 亜有美
【工芸学科】	(染)	尾崎 文香
	(ガラス)	松村 史紗
【立体アート学科】		荒尾 麻生子
		塚田 晶子

【デザイン学科】

(ヴィジュアルデザイン)	荒木 美里
(ヴィジュアルデザイン)	片野 彩
(ヴィジュアルデザイン)	佐々木 まどか
(環境デザイン)	高見 結衣
(プロダクトデザイン)	成島 歩美
(ヴィジュアルデザイン)	西野 明子
(プロダクトデザイン)	細井 なつみ
【メディアアート学科】	田尾 容子
	南郷 あい
	樋口 美樹
	中村 知美
	東郷 奈生子
	長瀬 由夏

【ファッション造形学科】

【優秀研究賞】	
【芸術学科】	石岡 奈々
	宮坂 真紀子

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN



学外卒業・修了制作展

大学院 美術研究科

●美術専攻 美術研究領域立体芸術
博士後期課程修了制作「飯嶋桃代・横田典子 展」
1月18日～1月25日 (上野の森美術館・ギャラリー)

●美術専攻 版画研究領域
「女子美術大学大学院版画修了制作展」
1月24日～1月29日 (シロタ画廊)

●美術専攻 工芸研究領域(織)
「やわらかい光」
2月28日～3月5日 (千疋屋ギャラリー)

芸術学部

●絵画学科洋画専攻 版画コース
「版画コース学外卒業制作展」
1月17日～1月29日 (GALLERY うえすと)

●工芸学科 織・染コース
女子美術大学工芸学科卒業制作2011
「テキステキ展」
2月24日～2月27日 (東京デザインセンター)

●工芸学科 陶・ガラスコース
女子美術大学工芸学科卒業制作2011
「クラセラミックス!」
1月27日～2月1日 (BankART Studio NYK 2F)

●デザイン学科 ヴィジュアルデザインコース
「女子美卒業制作展」
3月20日～3月21日 (原宿ラフォーレミュージアム)

●デザイン学科 プロダクトデザインコース
「JOSHIBI PRODUCT 2010」
3月25日～3月27日 (東京デザインセンター)

●デザイン学科 環境デザインコース
「女子美術大学デザイン学科環境デザインコース卒業制作展」
3月20日～3月27日 (アートギャラリー道玄坂)

●ファッション造形学科作品展
「19展」
2月23日～2月27日
(Gallery LE DECO 4F・5F・6F)

●メディアアート学科
「女子美術大学 メディアアート学科
2010年度卒業生有志学外卒業制作展 unius」
3月2日～3月7日
(横浜赤レンガ倉庫1号館1階・2階)

短期大学部 造形学科

●デザインコースクラフトデザイン系 テキスタイルデザイン
「女子美術大学短期大学部
テキスタイルデザイン卒業制作学外展」
2月22日～2月27日1 (銀座アートホール)

●デザインコースクラフトデザイン系 陶芸・メタルデザイン
「陶芸・金工・漆芸 展」
2月13日～2月19日 (ギャラリー青羅)

平成22年度 加藤成之記念賞

<大学院>
修士課程 デザイン専攻
ファッション造形研究領域 武内 まりな
<芸術学部>
絵画学科 洋画専攻(絵画Ⅱ) 金藤 みなみ
絵画学科 日本画専攻 山内 奈津美
工芸学科(染) 堀川 希成
立体アート学科 帆足 枝里子
デザイン学科 (ヴィジュアルデザイン) 奥田 麻未夜
メディアアート学科 榊 綾香
ファッション造形学科 西沢 瑞紀
芸術学科 宮坂 真紀子
<短期大学部>
造形学科 美術コース(絵画) 福井 裕子
専攻科 造形専攻 美術コース(絵画) 市川 陽子

平成22年度 福沢一郎賞

大学院 修士課程 美術専攻 洋画研究領域 大小島 真木
大学院 修士課程 美術専攻 版画研究領域 齊藤 慶子

平成22年度 大久保婦久子賞

大学院 修士課程 美術専攻 日本画研究領域 飯澤 早紀
大学院 修士課程 美術専攻 版画研究領域 小林 美佐子
大学院 修士課程 美術専攻 工芸(織)研究領域 吉田 悠子
大学院 修士課程 デザイン専攻 ヒーリング造形研究領域 水越 万紀子
大学院 修士課程 デザイン専攻 ファッション造形研究領域 佐京 督子
大学院 修士課程 芸術文化専攻 芸術表象研究領域 片山 実季

平成22年度 女子美術大学美術館収蔵作品展賞

<芸術学部>
工芸学科(染) 山崎 菜穂子

平成22年度 女子美術大学美術館賞

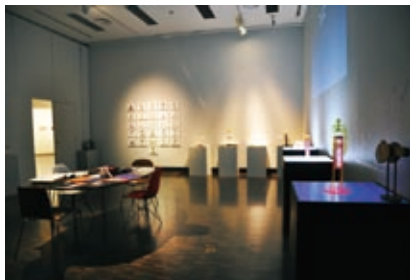
<大学院>
修士課程 美術専攻 立体芸術研究領域 松井 香楠子
<芸術学部>
絵画学科洋画専攻(絵画Ⅱ) 金藤 みなみ
絵画学科 日本画専攻 蝦名 将代
工芸学科(染) 山崎 菜穂子
立体アート学科 古井 彩夏
デザイン学科(プロダクトデザイン) 寺井 茉央
メディアアート学科 竹内 はるか
ファッション造形学科 海老沼 旭
<短期大学部>
造形学科 デザインコース 情報メディア系 室井 麻理

J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

JAM展覧会報告

平成22年度退職教員記念展

定年退職する実技系教員による展覧会。
清水明子先生（名誉教授）、早瀬和宏先生（大学院美術研究科視覚造形研究領域・芸術学部メディアアート学科 教授）の作品展示を行いました。（1月7日～1月23日）



障害理解とアートフィールド参画支援の取組

— 学生達が支援する新しいアートのミッション —

文部科学省による平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育プログラムとして採択された短期大学部による取り組みを報告する展覧会を開催しました。本取り組みは、障害理解の困難さを学ぶことを通じて学生自身が成長することを目的としており、障害支援施設や特別支援学級、NPO等との連携によりアート＆デザインが障害理解への新たなミッションを果たすための試みでもあります。（2月1日～2月20日）



平成22年度

女子美術大学大学院修了制作作品展
この3月で大学院を修了する学生の修了制作作品約50点を展示しました。
東北地方太平洋沖地震の影響により、13日までの開催となりました。

（3月10日～3月20日）
※3月12日は臨時休館



JAM展覧会予告

法隆寺金堂壁画をうつす

コロナタイプと画家による模写制作展

本展覧会では、法隆寺金堂壁画コロナタイプ版原寸大複製12幅を一堂に展示するとともに安田鞞彦、橋本明治、吉岡堅二らの模写作品を紹介します。金堂壁画本来の魅力とともに模写や複製の意義などについて触れる機会となれば幸いです。

（4月22日～5月15日）

同窓会企画展 予期せざる出発

昨秋、女子美創立110周年を記念して有楽町朝日ギャラリーにて開催された、同窓会企画展の巡回展です。「予期せざる出発」をテーマとして女子美の卒業生、在学生から公募した作品を展示いたします。

（5月21日～6月19日）

銀座gallery女子美 展覧会報告

5works

立体アート専攻研究室にかかわる篠崎京子、佐藤菜緒、佐野実果子、藤井瑠香、半澤友美による5人展。（12月13日～12月27日）

岡本敦生×平戸貢児

立体アート専攻非常勤講師・岡本敦生と立体アート専攻教授・平戸貢児による2人展。（1月12日～1月29日）

斎藤あきひこ展

立体アート専攻非常勤講師・斎藤あきひこによる個展。（1月31日～2月12日）

女子美術大学×PENTAX

デジタル一眼レフ グラフィックデザイン コンペ展

女子美術大学とPENTAXとの産学連携コラボレーションによる、一眼レフカメラの新しいグラフィックデザイン提案を目指したコンペティションの受賞作品展。

（2月14日～2月19日）

四つのコトバ

立体アート専攻非常勤講師・原智と、大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域修了の佐藤由佳、同研究領域博士後期課程2年松尾玲央奈、同1年福島さやかによる4人展。（2月21日～3月5日）

飯嶋桃代展

大学院美術研究科博士後期課程美術専攻美術研究領域立体芸術研究分野を修了する飯嶋桃代による個展。

東北地方太平洋沖地震の影響により、11日までの開催となりました。

（3月7日～3月16日）

横田典子展

大学院美術研究科博士後期課程美術専攻美術研究領域立体芸術研究分野を修了する横田典子による個展。（3月18日～3月27日）

NEWS ● 3 相模原市上溝地区シンボルマークをデザイン

相模原市上溝地区のシンボルマークに芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース3年の野々山友麻さんのデザインが採用されました。

相模原市、上溝まちづくり会議を母体とする実行委員会から上溝の活性化を目的とするシンボルマーク制作依頼があり、デザイン学科長谷川好男教授、原田かおり助手の指導により、ヴィジュアルデザインコース3年生（野々山友麻さん、木下遥さん、島崎藍さん、仲子なつ美さん、中野久美子さん）が取り組みました。制作プロセスとしては、上溝地区の児童・生徒、住民に「上溝らしさ」を表現するキーワードの応募が

あり、その中から選ばれた「伝統の夏祭り」を元に50点のデザインイメージが制作されました。そして街頭調査等が行われ約4,000件のアンケート結果から今回のデザインが選ばれました。

デザインコンセプトは上溝のお祭りでお太鼓をたたく人をイメージして、元気で動きのある作品となっています。

このデザインを元にフラッグ、ジャンパー、キャップなどが制作され、4月からマークの入ったグッズが上溝の街を彩り、7月に向け夏祭りを盛り上げることとなります。

「上溝夏祭り」はJR相模線沿いにある上

溝において江戸末期から伝わる伝統と歴史を誇る祭りで、毎年7月下旬の土・日に開催され、30万人を越す人出があります。



Topics ● 9 創立110周年記念展覧会 「Bleu Nuit —佐野ぬい作品展」を中国で開催

2月26日～3月20日に中国広東省広州の深せん市にある何香凝美術館において佐野ぬい学長の個展が開催されました。2月26日の開幕式には、作家である佐野学長始め本学より大村理事長ら7名が出席しました。式の中では、国务院華僑事務弁公室からのご祝辞、小松日本国領事館副領事のご挨拶を頂戴し、本学大村理事長からも挨拶を致しました。

佐野学長からは、「このような盛大な展覧

会を開催していただき誠に光栄に存じます。今後ますます交流が盛んになることを祈念します」と話され、展覧会タイトルとなった作品「bleu nuit」を何香凝美術館へ寄贈されました。ギャラリートーク、記者会見と盛りだくさんの行事がありましたが、佐野学長は抽象画を描くことについて丁寧に話され、中国の方々も先生の作品を熱心にご覧になっていらっしゃいました。



開幕式で挨拶をする理事長

NEWS ● 4 眞田 岳彦 教授 著書「ひらく衣服」出版



芸術学部アート・デザイン表現学科ファッションテキスト表現領域 眞田岳彦教授の著書「ひらく衣服 Prefab Coat A.X+α 2004-2010プレファブコート」が出版されました。

「プレファブコート」とは、普段は街着としてファッションを楽しむことができ、地震などの災害時には簡易テントにしたり、シートにしたり…その形態をフレキシブルに変え、悪環境から身体をプロテクトでき

る先端技術デザインコートのこと。本書は、女子美術大学研究所で研究開発を進めてきた「プレファブコート A.X」シリーズの制作と活動の記録を中心に紹介しています。

「ひらく衣服 Prefab Coat A.X+α」

著者：眞田岳彦

発行：女子美術大学研究所

定価：本体1200円（税別）

ISBN978-4-903238-48-7

Topics ● 10 公募展等 受賞者紹介

第16回真綿のヴィジュアル・アート入選

本橋 侑沙さん

(芸術学部工芸学科織コース (受賞時4年))

ecocon 2010—第8回全国大学生環境活動コンテスト—

入賞・会場賞

にこぱん

(学生の自主的活動団体「オストリッチーズ」・「グリーンマップ(GM)」・「わたけん(wataken.)」・「ボイシャキ(baishakhi)」の4団体から構成されるプロジェクトチーム)

お詫びと訂正

前号168号におきまして記載に誤りがございました。ここに訂正いたしますとともに深くお詫び申し上げます。

- p.9 「シンポジウム『現代アジアの女性作家』」
- 綿引展子氏作品キャプション
- (誤) 綿引展子「伸ばした手だけが並ぶ静寂」2009 布、水彩、カンヴァス
- (正) 綿引展子 栃木県立美術館 イノセンス展会場 2010
- 井上廣子氏作品キャプション
- (誤) 井上廣子「Inside-Out」2010 写真、インスタレーション 「イノセンス展」(栃木県立美術館)の展示
- (正) 井上廣子「Inside-Out,Steinhof Jugendstil Theater,Wien」2005



発行 学校法人女子美術大学

〒166-8508

東京都杉並区和田1-49-8

企画・編集 企画部 広報人試課

制作・印刷 株式会社日箱印刷

監修 山本 吉男

発行日 2011年4月6日

広報人試課では女子美のニュースを募集しています。
お気軽に左記までお知らせください。また、本誌の
定期購読をご希望の方は必ず先に広報人試課まで
ご連絡ください。

《広報人試課》TEL. 042-778-6123

E-mail: prs@venus.joshibi.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>